

国語科で涵養すべき「コミュニケーションリテラシー」 への一視座

—高校国語教科書における「日本的コミュニケーション」像—

栗原 賢

1. 研究の目的

国語科教育とコミュニケーションは非常に密接な関係にある。国語科の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全てにコミュニケーションが関わっており、そこでは「どのように他者に言葉を届けるか」「どのように他者の言葉を受け取るか」という思考力や表現力の醸成が望まれる。しかし国語科では、言語活動を通して他者と言葉を交わす際の一連の思考過程を育むのみならず、そもそも「コミュニケーションとは何か」という学習者自身のコミュニケーション観を養うことも肝要であると考えられる。村松(2001)は、国語科で養う力の1つとして「コミュニケーションリテラシー」を挙げている⁽¹⁾⁽²⁾。この「コミュニケーションリテラシー」について村松は、「内容知」と「方法知」の2つがあると述べている。

・内容知(宣言的知識)

…ことばやコミュニケーションそのものについての理解。

ことばにはどんな働きがあるのか、話し言葉と書き言葉の違いは何か、コミュニケーションはどのような要素で成り立っているのか。

・方法知(操作的知識)

…対話的活動の手順や方法に関する知識。

司会のやり方やディベート、会議、パネルディスカッションの進め方。
(pp.50-51 より筆者まとめ)

村松の、特に内容知における「コミュニケーションリテラシー」という考え方に基づけば、国語科教育とは「コミュニケーションとは何なのか」などの「コミュニケーションに対する見方・考え方」を醸成する場であるとも言える。

国語科では、学習者が上記の「コミュニケーションリテラシー」を育んでいく授業構想が必要である。そこで小稿では、基礎研究として国語教科書にはどのようなコミュニケーション観が示されているかを明らかにしていきたい。特に小稿で着目するのは、「日本的コミュニケーション」という概念である。「日本的コミュニケーション」について、『異文化コミュニケーション事典』（春風社）では「日本に多く典型的にみられるコミュニケーション」と述べられており、現代社会の中で形成されている「日本人・日本社会・日本文化のコミュニケーションスタイル」の総称であると考えられる⁽³⁾。この「日本的コミュニケーション」を取り上げるのは、上述の村松の論の中で次のような記述があることに由来する⁽⁴⁾。

また、異文化の相手とコミュニケーションする際にとくに必要になることだが、相手の価値観や行動様式、習慣、興味などについて客観的で偏らない知識をもつことも大変重要なことだ。

ここで村松は異文化とのコミュニケーションに言及しているが、広義に捉えれば文化とコミュニケーションの関係についてのリテラシーと考えられよう。実際に村松は「コミュニケーションリテラシー」を高める授業展開の一例として、撫俊男による「日本人はコミュニケーションが下手か」という論題のディベートの実践を紹介している⁽⁵⁾。これらを踏まえると、「コミュニケーションリテラシー」を考えるうえで「日本的コミュニケーション」に焦点化することには重要な意義がある。

そこで小稿ではこの「日本的コミュニケーション」が国語教科書の中でどのように扱われているかを明らかにすることで、これからの国語科教育において養うべき「コミュニケーションリテラシー」の方向性を定め、その後の教材研究の一助とすることを目指していきたい。

2. 「日本的コミュニケーション」の定義

古家(2013)は、「日本的コミュニケーション」について以下のように説明している⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

「日本的コミュニケーション」といった場合、それが日本独自であり、日本だけに特有という意味ではなく、西洋の国々にはあまりみられないようなコミュニケーションととらえる必要がある。(中略)日本に多

く典型的にみられるコミュニケーションとして考えられるものには、「阿吽の呼吸」、「甘え」、「遠慮と察し」、「以心伝心」、「ホンネとタテマエ」などがある。いずれも、日本人の対人コミュニケーションの特徴として、他者配慮や人間関係を含めたコンテクスト重視のコミュニケーション形式である。

この「日本的コミュニケーション」には下位項目が立てられている。具体的には、【阿吽の呼吸】(岡部)・【甘え】(手塚)・【遠慮と察し】(小山)・【以心伝心】(手塚)・【ホンネとタテマエ】(吉武)・【気】(瀬端)・【仲介】(古家)・【間柄と間人主義】(古家)・【表と裏】(遠山)・【言霊】(原)・【裸と祓】(遠山)・【暗黙の了解】(坂井)の12項目が存在する(丸括弧内は執筆者名、以降省略)。古家はこのような「日本的コミュニケーション」のルーツは、「縁起思想」にあるとし、相互依存や両義性を認める社会において、「環境や相手を含めたコンテクストを重視するところから生まれ、断定するよりは解釈の余地を残したり、意図的にぼかす表現を多用するコミュニケーション」と述べている⁽⁸⁾。

小稿では、上記の記述を援用し、「【阿吽の呼吸】などの12項目に関わり、日本に典型的に多くみられる、他者配慮や人間関係を含めたコンテクスト重視のコミュニケーション」を「日本的コミュニケーション」と定義する。なお、次節以降で上記の12項目を表す際には、【】で括るものとする。

3. 高校国語教科書における「日本的コミュニケーション」

3. 1 調査の方法

調査対象は、現行学習指導要領(平成22年度告示)下で編集された高等学校国語教科書(大修館書店・明治書院・桐原書店・教育出版・数研出版・第一学習社・筑摩書房・東京書籍・三省堂)である。学習指導要領は一度改訂されているため、文部科学省(2018)の『高等学校用教科書目録(平成32年度使用)』より、現在使用されている教科書として記載のあるものを対象とする⁽⁹⁾。対象科目は『国語総合』『現代文A』『現代文B』とし。中でも調査範囲を評論文に限定した。ただし教科書によっては、目次に「随想・評論」のようにひとまとめになっているものや、随想か評論か明記さ

れていないものも存在するために、それらは全て調査対象に含んだ。また、付録的な教材として掲載されている文章は対象外とした。

抽出する規準は、『2. 「日本のコミュニケーション」の定義』で示した「日本のコミュニケーション」の定義を用いて、以下の3点すべてに関する記述が確認できることである。

- ①『異文化コミュニケーション事典』の「日本のコミュニケーション」の下位12項目のうち、少なくとも1項目に関連している」
- ②「日本人に多く典型的なコミュニケーションであることが示されている」
- ③「他者配慮や人間関係を含めたコンテクスト重視のコミュニケーションであることが示されている」

3. 2 調査の結果

調査により、「日本のコミュニケーション」について言及があると思われる14件の教材を収集した。教材名や筆者名、採録教科書会社などを【表1】として以下にまとめる。ただし、教科書会社・教科書ごとに名称が異なったり、掲載する内容が若干異なったりする教材も存在した。そのため、大部分が同じ内容を掲載しており、かつ関連する「日本のコミュニケーション」が同一の場合は、同一教材として扱うものとした。

各教材における『異文化コミュニケーション事典』の「日本のコミュニケーション」の12項目から関連があるものを「関連項目」として記した。この項目においては調査の信頼性を向上させるため、信州大学教育学部3年生6名に調査協力を依頼した。初めに筆者単独で教科書を悉皆調査・教材の抽出を行い、そこに該当すると考えられる「日本のコミュニケーション」の12項目を当てはめた。その項目の妥当性を6名に検討してもらい、彼らの意見を交えつつ筆者が再検討を行っている。

【表1】高校国語教科書に採録されている「日本のコミュニケーション」
に言及がある教材群及び関連項目

番号	(上段)『教材名』著者 (下段)出版社名：『教科書名』	関連項目
①	『創造力のゆくえ』加藤周一	【表と裏】
	三省堂：『精選国語総合 改訂版』	
②	『空気を読む』香山リカ(※1)	【阿吽の呼吸】
	大修館書店：『国語総合 改訂版 現代文編』	【ホンネとタテマエ】
	『精選国語総合 新訂版』	【暗黙の了解】
③	『自由な主体に必要な「尋ねあい」』西研	【ホンネとタテマエ】
	(『自由な主体になるために』※2)	【暗黙の了解】
	大修館書店：『国語総合 改訂版 現代文編』	
	教育出版：『国語総合』	
④	『日本語のこころ』金田一春彦	【遠慮と察し】
	第一学習社：『高等学校 改訂版 新編国語総合』	
⑤	『間の感覚』高階秀爾(※3)	【暗黙の了解】
	第一学習社：『高等学校 改訂版 国語総合』	
	『高等学校 改訂版 新訂国語総合 現代文編』	
	数研出版：『改訂版 国語総合 現代文編』	
	明治書院：『新 高等学校現代文B』	
	教育出版：『新編現代文B』	
⑥	『相手依存の自己規定』鈴木孝夫	【甘え】 【暗黙の了解】
	東京書籍：『精選現代文B』	【ホンネとタテマエ】
⑦	『対話の精神』平田オリザ(※4)	【阿吽の呼吸】
	大修館書店：『精選現代文B 新訂版』 『現代文B改訂版 上巻』	【暗黙の了解】
⑧	『コミュニケーションの文化』平田オリザ(※4)	【暗黙の了解】
	第一学習社：『高等学校 改訂版 新編現代文A』	
	『高等学校 改訂版 標準現代文B』	
⑨	『コミュニティから見た社会』広井良典	【ホンネとタテマエ】
	大修館書店：『精選現代文B 新訂版』 『現代文B改訂版 上巻』	【暗黙の了解】

⑩	『人を指す言葉-自称詞・対称詞・他称詞』鈴木孝夫	【ホンネとタテマエ】
	大修館書店：『精選現代文B 新訂版』 『現代文B改訂版 上巻』	
⑪	『和の思想、間の文化』長谷川權	【暗黙の了解】
	大修館書店：『現代文A 改訂版』 『新編現代文B 改訂版』	
⑫	『日本語は非論理的か』野矢茂樹	【遠慮と察し】
	数研出版：『現代文B』	【暗黙の了解】
⑬	『知識社会という幻想』西垣通	【暗黙の了解】
	数研出版：『現代文B』	
⑭	『「世間」とは何か』阿部謹也	【ホンネとタテマエ】
	明治書院：『新 高等学校現代文B』	【暗黙の了解】

※ 1 参考として挿入されている図が異なるが、本文に異同はないので同一教材として扱う。

※ 2 教育出版は『自由な主体となるために』という題名で、大修館書店より本文が一部割愛されているが、ほぼ同じ内容であるため同一教材として扱う。

※ 3 各教科書会社によって冒頭部分が異なる部分があるが、ほぼ同じ内容であるため同一教材として扱う。

※ 4 ⑧⑨は同じ平田オリザ(2012)『わかりあえないことから』からの出典であるが、全く異なる箇所を取り上げているため、別々の教材として扱う。

今回調査対象に含めず「例外的に除外した教材」として、丸山眞夫『「である」ことと「する」こと』がある。理由は、この教材は全ての教科書会社が「現代文B」で採用しており、かつタイトルは同じでも掲載されている範囲が教科書事により異なっていたからである。従って、研究の目的の明確化と抽出規準の曖昧化を防ぐため今回の調査では対象としないこととする。

3. 3 考察

ここでは、前節での調査結果を踏まえて、高等学校国語教科書に出現する「日本的コミュニケーション」を考察していく。

14教材の結果を踏まえ、高等学校国語教科書に採録されている教科書

教材において出現している「日本のコミュニケーション」は、大きな3つの特徴・性質があると考えられる。それが以下のA、B、Cである。

A 言葉の省略

B 同調意識

C 対人関係の遠近・親疎の重視

本項では各項目について順番に述べていく。ただし前節でも述べたように、本節における教科書本文からの引用箇所は、表1中の太字になっている教科書から引用し、括弧内は表1の番号と頁数を示している。

3. 3. 1 「A言葉の省略」について

まず「A言葉の省略」について、これには②④⑦⑧⑩の教材が該当する。

例えば金田一春彦『日本語のこころ』では、本屋さんでお客が「漱石の『坊ちゃん』はありますか」と聞いたときに、「ごさいませんでした」という店員の言葉には、「私のところでは当然『坊ちゃん』を用意しとくべきでありました。しかし、不注意で用意してごさいませんでした、申し訳ありません」(④, pp.46-47)という店員の相手に謝罪する気持ちが含まれていることを述べている。その言外に潜んでいる店員の気持ちを客が汲み取るのである。金田一はこの背景には、言葉を短く言う一方で相手を慮る日本人の優しさがあるのではないかと考察している。まさに言葉を省略して使う日本人の姿が出ており、ただ省略するだけでなく、そこにある意味のニュアンスが含まれていることが述べられている。

野矢茂樹『日本語は非論理的か』では、日本人の言語使用の特徴を、言葉と言葉の連関性を明確に提示しないこととしている。そして省略した言葉のことを「断片」と表現している。日本人は相手の知識や状況等を加味して発話した結果、言葉を明確に繋げずに「断片」のみを相手に送り、その連関性は相手に繋げてもらうようなコミュニケーションとなっている。野矢は、「かなり高級な技術ではあるが、実のところ、普通の日本人の場合、日常のかなり低級な会話においても、それとなく発揮されている技ではある」(⑩, p.127)と述べ、このコミュニケーションが普段我々の周りに溢れていることを述べている。日本人は相手のことや場を考慮して「断片」を送る、まさに【遠慮と察し】が垣間見えるコミュニ

ケーションが書かれているのだ。

この野矢の文章から分かることは、「お互いに了解していることは言葉にしない」ということが挙げられる。このことは、平田オリザ『対話の精神』と『コミュニケーションの文化』からも読み取れる。『対話の精神』では、平田が「わかりあう文化」「察しあう文化」としている日本社会独特の特徴が述べられている(⑦, pp.10-12)。日本社会にある「お互いに了解していることは言葉にしない」という文化が、平田が言うところの「対話の精神」の概念の希薄化に繋がったといえる。『コミュニケーションの文化』でも、「声や形にして表すのは野暮だという文化」について書かれている。平田は例として「エレベーターに乗ると無言で階数の表示を見上げる」日本人の姿を、アメリカでの事例と対比させるようにして挙げている(⑧, p.107)。香山リカ『空気を読む』でも同様である。本文冒頭で香山はテレビの生放送番組でコメンテーターを務めた時のことを挙げており、誰も話していないのに場の空気を読んで人々が【阿吽の呼吸】で番組が進行している様子を述べている(②, p.60)。これがまさに「言葉の省略」の究極な姿であろう。

以上より、「A 言葉の省略」において言えることは、「日本人・日本社会では、お互いに了解していることは言葉にしない」という日本人のコミュニケーションの傾向が書かれているということである。金田一の『坊ちゃん』の例においても、店員は野矢で言う「断片」を送ったのだろうと考えられる。それは相手はその意図を汲み取れるだろうと思っていることである。それが『コミュニケーションの文化』のエレベーターの例では、「断片」さえも送らない言葉を省略し切った姿や、『空気を読む』で挙げられているように【阿吽の呼吸】のように見えるのだろう。

3. 3. 2 「B 同調意識」について

次に「B 同調意識」について、②③⑥⑨⑩⑭の教材が該当する。

このことについて主に日本人の言語使用の側面から考察しているのは、鈴木孝夫の『相手依存の自己規定』と『人を指す言葉 - 自称詞・対称詞・他称詞』である。『相手依存の自己規定』では、「日常の生活の中で自分および相手をどのように言語で表現しているか」から日本人の自我構造を論じ、「自己と相手の立場の同一化」とし、「柔らかい、相手と同調し

なければ安定しないような自我の構造」と述べている(⑥, pp.53-57)。また、『人を指す言葉 - 自称詞・対称詞・他称詞』でも同じように会話の中で自分や相手をどのように呼ぶかということ述べている。鈴木は日本人の呼び方から、「相手との関係はむき出しの直接的なものより、やんわりとした間接性のあるもののほうがよいというこの感覚」(⑩, p.352)があるとし、転じて相手に同意協調する日本人の姿を書いている。言葉の側面から見れば、日本人は「相手に合わせる」という性質があることが言えるだろう。このことが、「同調意識」が書かれている教材に広く共通する。

日本の「同調意識」を現代社会の問題点として述べているのが、香山リカ『空気を読む』、西研『自由な主体に必要な「尋ねあい」』、広井良典『コミュニティから見た社会』である。香山は教材の題名の通り現代社会の「空気を読む」という風潮をメインに論じている。香山が「場の空気を読む」ことの例として取り上げているものの1つに、「昨日のテレビ見た？」と聞かれた学生が、場の空気がそのテレビに肯定的であれば、自分の意に反して「おもしろかったよね！」と答える場面がある。このことから香山は、「対話もコミュニケーションというよりは空気を読み合うゲームになってしまう」と述べている(②, p.61)。西も同様に日本社会において、「「集団の中で自分の思いを出すのは危険だ。自分からは何も言わず、集団の空気を読んで対処しないといけない。」という感じ方のほうが、ひょっとすると多数派かもしれない。」と述べており(②, p.27)、やはり現代日本には「空気を読む」風潮があることを感じ取っている。西はこのことを、「語りあいながら共通の問題を解決していくという点でも、私たちはいまだ「自由な主体」になっているとは言い難い」とする根拠として用いており(③, p.27)、「空気を読む」ことが「尋ねあい」コミュニケーションを阻んでしまっている要因になっているとしている。広井は、日本人の「身内」と「他人」、つまり「ウチ」と「ソト」における関係の「落差」に注目している。「内側に向かって閉じる」というこの社会構造が、「「身内」あるいは同じ集団に属する者の間では、過剰なほどの気遣いや同調性が強く支配する」というコミュニケーションに繋がっていると論じている(⑨, p.195)。

【ホンネとタテマエ】の項とほぼ同様のことを述べているのが、阿部

謹也『「世間」とは何か』である。ここでは明確に「世間」という言葉が用いられ、西欧の「社会」と対比的に用いられている。阿部は日本人の性質を、「日本人にとって周囲と折り合ってゆけるかぎりで、世間の中で生きるほうが、競争社会の中で生きるよりは生きやすいのである」(⑭, p.301)や、「日本の個人は、世間向きの顔や発言と自分の内面の想いを区別して振る舞い、そのような関係の中で個人の外面と内面の双方が形成されているのである」(⑭, p.306)として、周りに合わせて自分の内面と異なる外面を作り出すという日本人のコミュニケーション・スタイルが見て取れる。

以上より、「B同調意識」において言えることは、「日本社会では相手に合わせて、相手を基準にして自分の存在や立場、考えや意見などを決定するコミュニケーション・スタイルを取る」という考え方が存在していることである。「相手」というのは、「他者」でもあり「世間」でもある、「自分ではない存在」のことである。それに同調する日本人や日本社会の姿は、鈴木が『相手依存の自己規定』で言うところの「日本人には真の対話がない」(⑥, p.58)状態となったり、西の「自由な主体」(③, p.27)になれなかったり、阿部の「闊達な雰囲気」(⑫, p.301)を阻んでしまうというマイナスの影響が書かれていることが分かる。「同調意識」が日本人の「コミュニケーションの型」であるという考え方が評論文の筆者たちの中にあるのだろう。

3. 3. 3 「C対人関係の遠近・親疎の重視」について

最後の「C対人関係の遠近・親疎の重視」については、①⑤⑨⑪⑬⑭の教材が該当する。

「対人関係の遠近・親疎の重視」において、まず特徴的な「間」という言葉を用いて論じているのは、長谷川權『和の思想、間の文化』と、高階秀爾『「間」の感覚』である。長谷川は、「誰でも自分以外の人とのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であっても長短さまざま心理的な距離、間をとって暮らしている」とし、「間の使い方はこの国のもっとも基本的な掟があって、日本文化まさに間の文化ということができると述べている(⑩, p.27)。この「間」は、異質なもの同士を調和させる「和」に必要である。高階も「間」についてかなり類似していることを述べて

いる。高階は、「「間合い」を正しく見定めることが、日本人の行動様式の大きな原理である」とし、日本人はコミュニケーションを取るときの距離感、遠近というものを重視することが述べられている(⑤, p.141)。その「間」の関係性を見極めることこそが日本人のコミュニケーションにおける【暗黙の了解】だと言える。

また、高階は日本人の特徴として、目に見えない形で内外を区別する意識があることについても言及している(⑤, p.140)。ここでは、「身内」「仲間」と「よそ者」という形で内側と外側が表されている。このいわゆる対人関係の「ウチ」と「ソト」という親疎関係が表れているのは、広井良典『コミュニティから見た社会』、西垣通『知識社会という幻想』、加藤周一『創造力のゆくえ』である。広井は「ウチとソト」という言葉を明確に用いている。日本社会におけるこのようなコミュニケーションの傾向を、「家族主義的」や「農村型コミュニティ」という言葉で表し、「ウチとソトを明確に区別する」「集団が内側に向かって閉じる」といった日本社会にありがちな行動パターンや関係性」というように述べている(⑨, p.196)。西垣も同様に「この国には伝統的に内向きで閉鎖的な風土があり、とかくムラを作って仲間内に都合のよい談合をしたがる」と述べている(⑬, p.266)。西垣はこのことを、現代の情報化社会に対する論を展開する中で用いている。加藤は「ウチ」と「ソト」という言葉は用いていないが、「表向きと裏の本音の二重性」について触れており、例として「今でも一人の日本人が、家庭の中で、または知人との出会いにおいて、劇場の中や電車の中で見ず知らずの人々と接していた時とは、別人のようになることが多い」ことを挙げている(①, pp.181-182)。これも一種の「ウチ」と「ソト」の関係と言えるだろう。

これらとは異なり、「世間」という視点から対人関係の親疎に言及しているのが、阿部謹也『「世間」とは何か』である。阿部は、日本人は「世間」の中に「個人」が位置付けられているとしたうえで、日本人が海外の人々と付きあわない傾向を例に挙げ、「初対面の人の場合でも、いったいどういう人なのかをまず探らなければつきあいが始まらない」、「世間が違いすぎると親しくなる可能性は引くのである」と述べている(⑫, p.300)。これも、日本人が対人関係の親疎を重視することが表れているといえよう。

以上より、「対人関係の遠近・親疎の重視」において言えることは、「日本人や日本社会では、他者との社会的地位や心理的距離感を重視し、その親疎関係によってコミュニティを作る」という「日本のコミュニケーション」観を、評論文の筆者たちは持っているということが分かる。高階や長谷川が述べるようにその距離を見極めること自体も大切とされ、また、距離が離れすぎていると「ソト」ということになり、距離が近い「ウチ」同士で固まる傾向があるとされているようである。

4. 国語科で涵養すべき「コミュニケーションリテラシー」

前章まで、「日本のコミュニケーション」という観点から高校国語教科書教材を抽出し、「言葉の省略」「同調意識」「対人関係の遠近・親疎の重視」という分類を設けてその内実を詳述してきた。

抽出した教材全体を俯瞰すると、総じて「文化(使用言語や〇〇人という概念も含む)・コミュニティがコミュニケーションスタイルを規定する」という認識を前提として書かれた文章であると言えよう。「日本人・日本社会・日本文化のコミュニケーションスタイル」といえば「言葉の省略」「同調意識」「対人関係の遠近・親疎の重視」であり、これは多くの人々にとって潜在的に共有していると考えられる。特に、いわゆる文化論や日本人論などといった分野の文章以外の、現代社会を論じた文章(香山リカ『空気を読む』・西研『自由な主体に必要な「尋ねあい」』・広井良典『コミュニティから見た社会』)にも、「日本のコミュニケーション」という概念が当然のように存在していることがその証左である。このような概念は、教科書教材の中で半ば無条件に自説の論拠や現代社会の問題点として取り上げられている可能性がある。

これらを踏まえ、国語科教育では学習者にどのような「コミュニケーションリテラシー」を育む必要があるだろうか。1つ考えられることは、「文化・コミュニティとコミュニケーションスタイルの関係性を問い直す力」が求められるということである。本研究に即して言えば、「日本のコミュニケーション」という「文化的ステレオタイプ」をクリティカルに捉えることが重要だろう。個人が所属する文化・コミュニティと個人のコミュニケーションスタイルとの関係性は、完全に否定できるものではない

が、完全に肯定できるものでもない。従って、目の前にいる相手が特定の文化やコミュニティ圏内にいるからと言って、必ずしも統一されたコミュニケーションスタイルを持ち得るわけではないことを考慮しなければならない。この関係性を自明のものと捉えず、自らクリティカルに思考できるようになってこそ、真に多様な人々とのコミュニケーションが可能になると考える⁽¹⁰⁾。

このように述べると、一見「1. 研究の目的」で引用した村松の、異文化に対する「客観的で偏らない知識を持つことも大変重要なことだ」という言説に回帰したようであるが、筆者の考えは多少異なる。殊更コミュニケーションに関しては、「客観的で偏らないでいようとする態度」やそのための批判的思考力を養うことの方がより重要なのではないか。その点、こちらも同様に「1. 研究の目的」で取り上げた撫俊男の実践は、「日本人は本当にコミュニケーションが下手なのか」というクリティカルな問いを設定することにより、まさに筆者が重要と考えている「コミュニケーションリテラシー」の涵養に資するものである。

文化やコミュニティを超越し、目の前のただ一人に向き合おうとするための「コミュニケーションリテラシー」が必要であり、国語科教育でもそのような方向性で教材研究・授業構想が行われることを検討するべきである。

【注】

- (1) 村松賢一(2001)『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習-理論と実践-』(明治図書, pp. 45-51)
- (2) この「コミュニケーションリテラシー」という用語は、国語教育に関わる辞典・事典である、『国語教育指導用語辞典[第五版]』『国語科重要用語事典』『国語教育総合事典』のいずれの事項索引にも無かったため、村松が独自に提唱した用語であると考えられる。
- (3) 古家聡(2013)「日本のコミュニケーション」(石井敏・久米昭元編『異文化コミュニケーション事典』春風社, p. 391)
- (4) (1)と同書, p. 50
- (5) (1)と同書, pp. 136-137, p. 152。村松自身はこの実践で高める「コミュニケーションリテラシー」を、「討論の社会・文化的意義を理解する」と設定してお

り、「討論」そのものの価値を学習者に自覚させることが目標となっている。しかし、結果的に学習者が文化とコミュニケーションの関係性についても考えを深められる課題設定となっているため取り上げた。

(6)(3)に同じ

(7)本論文内で「コンテキスト」と「コンテクスト」の2つの呼称が表れるが、原則同義として扱い、引用部分以外は全て「コンテクスト」で統一する。

(8)(3)に同じ

(9)文部科学省(2019)『高等学校用教科書目録(平成32年度使用)』, pp.1-5

https://www.mext.go.jp/content/1416044_003_1.pdf (2019年12月29日最終閲覧)

(10)ただし、「文化・コミュニティがコミュニケーションスタイルを規定する」という認識そのものが悪であるというわけではない。例えば徳井(2007)では、ステレオタイプに気付くことが相手との関係構築を促す作用があることを示している(pp.28-32)。「文化・コミュニティ」と「コミュニケーションスタイル」の関係性が自明のものではないという姿勢を持つことが重要である。

【参考文献】

石井敏・久米昭元編『異文化コミュニケーション事典』春風社

高木まさき他編著(2015)『国語科重要用語事典』明治図書

田近洵一他編著(2018)『国語教育指導用語辞典[第五版]』明治図書

徳井厚子(2007)『日本語教師の「衣」再考 - 多文化共生への課題 - 』くろしお出版

日本国語教育学会編(2011)『国語教育総合事典』朝倉書店

村松賢一(2001)『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習-理論と実践-』明治図書

文部科学省(2019)『高等学校用教科書目録(平成32年度使用)』

https://www.mext.go.jp/content/1416044_003_1.pdf (2019年12月29日最終閲覧)

(くりはら けん 文化学園長野中学・高等学校)